

思想

1999

思想の言葉	加藤哲郎 (1)
破局としての政治(上)	小野紀明 (4)
——ハイデガーにおける瞬間の美字——	
「理想的クロノクル」再考	上村忠男 (31)
——歴史のヘテロロジ-のために(4)——	
「豊原水刺国」とは何か	西郷信綱 (56)
——その政治的・文化的な意味——	
〈対談〉	
求めの政治学	李 静 和 (75)
——東アジアの近代と現在をめぐって——	船 銅 哲
第二次世界大戦とフランス植民地	平野千果子 (96)
——「克服すべき過去」とは何か——	
楡のコミュニケーション	川俣晃自 (119)

No. 895

岩波書



闊達な座談が描き出す類いまれな同時代史
 人々と語り合い議論することをこよなく愛した丸山眞男氏が、その時々によりき相手を得てくりひろげた座談を集成。学問から時事問題・芸術まで、知性と感性の響き合う闊達な座談の中から、類いまれな同時代史が立ち上がる。
 四六判・上製カバー・平均三五〇頁・月報付

丸山眞男座談

全9冊
 (完結)

最終回/発売……………本体3400円

一九八三—一九九五

晩年の丸山は揺れ動く時代の中に何を見ていたのか。自らの歩む方と現在の状況とを往還する対話に刻まれた地ゆむことなき思索の跡。

全巻の構成……………本体各3400円(全9冊合計本体30,600円)

- ①一九四六—一九四九 ②一九六四—一九六六
- ③一九五〇—一九五八 ④一九六六
- ⑤一九五八—一九五九 ⑥一九六六—一九七六
- ⑦一九六〇—一九六一 ⑧一九七七—一九八二

岩波書店

価格+税



〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
<http://www.iwanami.co.jp/>
 (オンラインショップ オープン)



T 1104203011203

Printed in Japan

雑誌 04203-1

9755

第八九五号

短い二〇世紀の解得構化

加藤哲郎

太陽と月の動きに合わせた自然的時間、時計の針で均質に刻まれる物理的時間のほかに、社会的時間といふべきものがあるとすれば、二一世紀は、もう始まっているのかもしれない。

一九一四年の第一次世界戦争勃発から九一年ソ連崩壊までを「短い二〇世紀 極端の時代」と早々と総括し、描きだしてみせたのは、ロシア革命の年に生まれた歴史学者エリック・ホブズボームであった。彼が三冊の大部の著作(革命の時代、資本の時代、帝国の時代)で描いた「長い一九世紀」と比すると、「短い二〇世紀」は、二次の世界戦争を体験した「破局の時代」と、その後の東西冷戦が経済発展競争となった「黄金の時代」で構成される。しかしそれが「地すべり」がおこり、八九年東欧革命、冷戦終焉、九一年ソ連解体でサイクルを終えた、というのだ(『新訳二〇世紀の歴史』上下、三巻集、一九九六年)。

その著書の冒頭に掲げられた「アイザイ・バトリン以下二二人のヨーロッパ知識人・芸術家の二〇世紀短評」は、一九九二年に採られたものではあるが、辛辣かつグルエミーであり、物理的時間でも目前に迫った二一世紀の不透明性・不安定性とオーバーラップする。曰く「西欧の歴史におけるもっともおそろしい世紀」「虐殺と戦争の世紀」「人類史上最も暴力的な世紀」等々。科学技術進歩や女性の歴史の台頭から希望を語るさいにも、「人類がこれまで抱いた最高の希望を打ち出し、同時に幻想も理想もすべて打ち砕いた(音楽家エーティ・メニエーヒン)と留保が付される。

たしかに二つの世界戦争に急戦を加えた暴力装置の増殖と人為的行使、地球を限りなく一つに近づけた科学技術と経済市場の発展は、同じ二〇年の業裏であった。ホロコーストとヒロシマ——二〇世紀のなかでドイツと日本を特異なものとした二つの「極端な」体験は、それが「正常」の延長上での「極端」であったがゆえに、

社会運動と出版文化
近代日本における知的共同体の形成

梅田俊英著 A5判 三六〇頁 五〇〇〇円

大正字モクラシム期における社会運動と出版文化の歴史を、手紙、手摺、新聞など新しい史料で再構成。

大恐慌期日本の通商問題
白木永旭著 A5判 四〇〇頁 七三〇〇円

一三〇年代前半の統制経済の推進要因は世界大恐慌とともに世界経済のプロシク化である点を中小工業の輸出統制から論議。

日本農地改革史研究
庄司俊作著 A5判 四三〇頁 六九〇〇円

折廻改革の歴史的成程を改革後の農村の社会政治構造から分析し、農地改革が自作農制度方式をとった歴史的必然性を説明。

御茶の水書房 東京都文京区本郷一-30-20 電話03(3284)0751

「いのち」の人間学
アントロポロギア
福田静夫[著]

社会福祉哲学序説
「いのち」をキーワードに、現代という大きな転換の時代がはらむ「人間」の諸問題を多様な視角から解析する。 ●¥3600

資本主義とはなにか
西田理明[著]

概念と用語表現の混迷をただし、裏面と多様化の現実をふまえて、資本主義の根本性格を追究する。 ●¥2200

青木書店 東京都千代田区神田神保町1-60 (03)3219-2341 税別

インド仏教碑銘の研究 I
TEXT・NOTE・和訳

原本碑銘 インド本國で出土した古碑銘のそれぞれに対し、公刊の情報を基として、手書きの写本と和訳を施し、なインド仏教史研究の文庫。 B5判 三〇〇〇円

アバーラタの哲学 佛敎経典 上
中村元著 古代インド人の世界観、人生観、宗教観、政治観、倫理観、法観、学問観の成立、展開を、豊富な資料を基に、A5判 二〇〇〇円

仏教における日常生活
日本仏教学会 日常の思想や行動に生かされて初めてその意義を領受する仏教思想、また日常生活に、と形式や行為が有する仏教的な意味を、改めて問い直した論考。 A5判 六七〇〇円

平楽寺書店 東京都中央区東洲三-3 電話03(55)21-0016 税別

丸山眞男講義録 全七冊

第一冊 日本政治思想史 一九四八 三三〇〇円

第二冊 政治学 一九六〇 三三〇〇円

第三冊 日本政治思想史 一九六四 三三〇〇円

既刊

A5判 平均三四〇頁 / 表紙は本体価格

東京大学出版会 東京都文京区本郷7-3-1 電話03-3811-8814

必ずしも「異常」ないし「非合理」と割り切れないものがある。事実、百年の長さで見ると、「破局の時代」に「異常な病理」を体験した二つの国が「黄金の時代」の「正常な」経済発展の優等生となった。そこに例外や断絶だけをみるのは無理があるから、一方に「ファシズムの近代化効果」や「一九四〇年体制」の議論が生まれ、他方でデューブ・エコロジイの思想も生じた。二〇世紀の枠内で対立物と映っていたものが、人類史の尺度で測ると双生児にも見えてくる。

だが、二〇世紀の真相は、まだ総括できるほどには、明確ではないのではないかと。むしろ、ようやく冷静に振り返ることが可能か、とは口についたばかりではなからうか？

筆者はいま、ベルリンに滞在している。まもなく首都に復帰するこの街では、二二世紀都市への実験が様々に行われている。「ベルリンの壁」崩壊から一〇年近く、その物理的痕跡を見いだすことは難しい。しかし、社会的な影は、いたるところに見られる(<http://www.fh.uni-berlin.de/katote/Home.html> 参照)。

ホロコーストが非道な国家犯罪と認められたのは比較的早かったが、その全体像が明らかになったのは、実はその記憶が風化した「壁」の崩壊後、旧東独史料の収集・公開によってであった。ヒロシマの背後に日本の加害者責任をも併せもつ視点を常識とするには、戦後生まれ世代が過半を占めるまでの歳月を要した。ホロコーストと併行したスターリン粛清にいたっては、「短い二〇世紀」が終わってようやく史資料が現れてきたばかりだ。おまけに二〇世紀には、その「極端さ」ゆえに、様々な神話や伝説がつきまとい続けた。神話や伝説の影に隠されていた史実を再現するのは、そう容易なことではない。

この間モスクワやベルリンで、一九二〇・三〇年代の記録を収集してきた。主として在外日本人に関係する外国語資料だが、多くの日本語資料も世界の公文書館で閲覧できる。そこでは正常と異常が併存し、合理主義の極に非合理があったように、民衆の日常生活のなかに人種差別があり、戦争願望があり、指導者崇拜が生まれた。ホロコーストの端緒は、ベルリンでは三三年一月ヒトラー政権直後に、はじめは「正常な」日常性のな

かて始まる。当地で手に入れた最新の研究は、それを淡々と日誌にする。二月十七日、ナチ突撃隊の団がたまたま試験中の国立美術学校に乱入し、何人かのユダヤ人教授を追いだし、教授を守ろうとした学生たちを殴打した。その「突発的」出来事が四月一三日にはベルリン大学に及び、ドイツ学生団が大学からの「非ドイツ的精神」追放を決議し、ユダヤ人教授の講義ボイコットに入る(参. Gruner, Judenverfolgung in Berlin 1933-45, Edition Heinrich, 1996)。コブレンツ連邦文書館の独目協会関係資料では、まずドイツ側のユダヤ人が役員からはずされ、やがて事務文書の末尾に「ハイル・ヒトラー」と書かれるようになる。それは「敬礼」にあたる当時のナチスの定型コミュニケーション様式で、「非アリア」日本人もそうした雰囲気になじんでゆく。

二〇世紀の日本にも、様々な神話があった。たとえばモスクワのロシア現代史史料保存研究センターでみつけた一通の英文文書。一九二三年九月の月付があり、大きな朱印が押され、荒畑寒村・界利彦が署名した、日本共産党の創立綱領だった。二〇世紀に信じられていたところでは、この頃モスクワでは天皇制廃止をうたった綱領草案がつかられ、創立期日本共産党はそれをめぐって紛糾し、権力に弾圧され、『獄中十八年』の英雄が生まれたはずだった。だがこの綱領には、君主制についての記述はなかった。そればかりか翌二三年以後の日本からの報告書類にも、普通選挙に積極的に加わるべきか否かという議論しかでてこない。日本の共産党が天皇制をまともにとりあげるのは、どうやら「二七年テーゼ」以降のようである(加藤「一九二三年九月の日本共産党綱領」『大原社会問題研究所雑誌』一九九八年一二月号以下)。

この百年で生まれた歴史のねじれを解きほぐすには、人類史のタイム・スパンでのマクロな構想力と、一つの出来事のミクロな検証の、双方が必要とされる。鳥の眼と虫の眼を併せもち、鳥瞰図と虫瞰図を一緒に作らなければならない。そして、二〇世紀の脱神話化とは、鳥と虫の間に人間の眼をおき、日常性のなかに併存した正常と異常、合理と非合理の境界線を引き直す作業にはかならない。叙事詩や英雄伝が書かれるのは、その後でも遅くはない。社会的時間は、類としての人間が定め、刻みつけているものであるから。